

松浦佐用媛石魂録

後集卷之四

13
3240
9



門へ 13
號 3240
卷 9

松浦佐用媛石魂録後集卷之七

東都

曲亭主人編次

第廿二回

乾坤丸中も亦復親族と聚ふ

案了前駒再説前探題經高ハ迹を暗ま一影と隠し三稔追捕を
免せざる縁由を原る小曩は經高孤城は籠りて鎌倉の追討使実政の
大軍は捕田をとりて城中の脱穴より士卒と共に落亡せり頼切は股
肱の老黨邊蛇ノ平次將純を主と帯て往方を知るま況との餘の軍
兵も僉四落八散より果て身も隨べのとの浮篁伊加太郎槍垣轉
馬と叫れる只西箇の若黨のを左右小扈後をりける現落人の治言を天の
踏下地は踏みく杉木樵る山の賤婦は一碗の糧を乞ひ細吏まる浦の盤石
半夕の宿を討んと欲する人僉逆徒の残兵をんと思はれを憐れむ社校

福嶋

富

石魂録後集卷之七

昭和十年九月九日 購求

らる。驅催し。捕捕んとあつて。辛くその所を立去り。松浦を今
 福の浦と過ると。日暮れ。宿もな。主後。餓疲。せ。せ。樹。身。
 登時。経高の磯。石。尻を拭く。伊加太轉馬。召近。武運。身。
 尚浦。人。生。拘。れて。矢田の陣所。牽。れ。恥。の。又。恥。の。腹。を。切。らん。
 汝。小。錯。し。首。を。海。へ。沈。め。よう。あ。ろ。る。飲。と。操。返。を。覚。期。の。還。言。雄。々。
 一。は。鎧。を。脱。ぎ。坐。せ。占。ま。と。林。示。め。ま。と。今。更。心。後。ま。密。音。子。念。佛。
 まで。後。ひ。あ。る。子。あ。を。折。り。の。経。高。を。敷。て。実。改。降。参。せん。その。の。果。さ。
 び。み。ろ。腰。小。著。ら。れる。金。を。奪。之。逐。電。ま。と。示。合。せ。の。共。れ。今。経。
 高。が。自。殺。の。覚。期。を。己。が。利。と。く。竊。小。飲。び。支。稍。成。ぬ。と。い。も。け。り。氣。な。死。
 面。色。し。と。兩。人。齊。一。跪。た。つ。と。う。ち。受。て。泣。く。共。侶。小。答。る。千。軍。万。馬。將。る。

死。身。武。運。の。竭。き。る。ひ。の。覚。期。を。痛。き。け。御。先。途。を。え。ぬ。身。ま。を。
 兒。供。仕。く。い。も。大。厦。の。傾。ん。と。な。一。木。の。支。も。な。の。兒。自。害。ゆ。兒。
 頸。を。石。を。附。て。海。中。に。推。沈。め。某。も。共。侶。小。底。の。水。層。と。り。切。て。の。
 本。意。よ。い。と。と。薦。る。心。經。高。遂。に。已。ま。ぬ。及。不。と。短。刀。を。抜。き。合。手。
 直。し。と。腹。を。切。ら。ん。程。も。等。め。と。呼。林。め。く。七。八。美。少。年。萌。葱。威。の。
 身。甲。小。龜。甲。形。多。肢。甲。臙。角。と。紫。銅。造。の。兩。刀。を。踏。へ。皂。蛇。皮。榜。の。小。袖。を。
 衣。る。磯。馴。松。の。邊。より。忽。然。と。頭。巾。を。主。後。駭。怪。き。其。方。を。齊。一。え。り。
 誰。や。と。ろ。り。向。う。け。尚。い。ま。も。少。年。は。も。あ。と。經。高。小。ち。對。ひ。縁。故。を。
 知。召。御。不。審。の。理。り。某。の。牛。淵。九。郎。清。繩。が。兵法。の。弟子。也。燒。口。歌。三。郎。得。
 時。と。呼。れ。の。曩。小。清。繩。は。後。に。飛。蘭。渡。の。砦。を。成。せ。ひ。清。繩。の。戰。没。し。て。
 砦。を。東。軍。に。攻。潰。され。籠。る。所。の。三。百。餘。騎。或。は。敷。れ。或。は。落。亡。既。小。資。を。失。ふ。

のろ某残兵を招鳩めてゆひ飛蘭渡の若と執建とて會秘且の恥を雪んと
 紫甲斐君の没落寓方の城を落されぬひく死性方知れるとて世の風声は
 隠れるれば環會なりて犬馬の力と盡さるる孤忠の空にや見参る
 一筋の何の歎れは優に某既くを隠宅を準備しつて御心安く思召れよ自
 殺を急せぬん物体るてそよよ経高又驚はて且歎びて刃を歛め原来和
 殿の清繩が兵法の弟子なり歎豫てその姓名も傳はるるも其心を
 用ひれば清繩ある蘇生してこれを済む心地を尋ね和殿の準備せ隠宅の
 何処ぞと問へ歌二郎声を密めてさし西九ヶ國の總て敵地ありければや
 深山の奥より陸地の死住ひる危一某の義を思ふると大なる船を八
 艘造浮めて連環しと敷系合せ九艘をれも一艘は異なる船の二艘毎に
 長廿二餘間ありこれを九艘合一れば百八九十間の大船之船中置直るれ士卒

二百餘人あり又兵糧も乏しく且船の中は菜園あり日毎は獲船あり浮り漁
 獲を食とるる庖厨は物を欠くとも君の船は海を東西南北風は任しく
 到らざる処き出沒不測の大利あり進て九ヶ國の港を討界各々退て狐嶋に歌
 討の軍兵を防ぐべし尙志をば勢以微りて成るる船は生涯を送る
 とも誰うとこれを知れば是洋中の別世界究竟の隠宅されば則ち船を命けく乾
 坤丸と呼做し誘ふお迎の三板船浦邊ありとていさきたるひは誠
 心は経高只顧感嘆する恥て頼み加えりて釋て親を改めり折れ勢以究て落
 人となりより恩顧の者も棄れられて仇らぬものもよとて世の中は
 資のあらんと清繩が弟子たる縁を忘れ義はけりとも年のころは身ありあを
 賢くごとい大義の計畧感ざるも月餘あり既し準備せられしを推辭
 死やと轉馬も伊加太郎も歌二郎も對面して歎びを述ぶるとこれと兩人進

出く名告せり主の連る身の幸ひを欲ひたり登時歌二郎の漁の方から向ひく
 叫子の笛を吹鳴せり忽然と二箇の雑兵快船漕走りて浪打際
 著けり歌二郎を捉へて則経高主後を扶け船を乗移りてその身も共乗
 程は雑兵ホの船を推進し漕ぎて幾里を知らず既ぬ乾坤丸の浮り小
 船を寄せり歌二郎は又経高主後を件の大船に請乗し船に三板船を引揚
 けり當下経高主後の首を面して大船の光景を望み二十間を餘る船に九
 艘繋合しこれ總て百九十間あり裡面は樓閣を作做る奇麗壯觀のよう
 もあるこの餘書齋あり便室子合耳房あり局の内も前栽あり花紅葉のいろ
 る栽並べ菜園の畝毎の寒暑の時後て百の種子を時做る異木芳草の美
 し一枚本も違わぬ且弓箭刀戟の道具も衣裳調度に至るも満足なものと
 してこれれは波底ありと龍宮城ありと水仙人の聚るといふ貝瀬玉洞るん欵

と疑惑不可も目も坂馬を走るとあり有此而焼口歌二郎の上座を酒の上は経高主請
 登り船中も在る宗徒の士卒を悉く見参り且嬋娟なる美女十人をも左右
 侍りて祝壽の丕を薦めける饗饌大なるこれ経高主歡喜雀躍して望足りて
 此の勢ひの如く流れ檣垣轉馬浮篋貫伊加太郎ホの忽地野に轉り主の
 後を故の如く且歌二郎は媚諛ひ酒肉の餘興を貪り光陰を過ぎ送りけり
 然程は焼口歌二郎の乾坤丸の連環船を一所に歌置き遠く千里千里近
 しといふも百里二百里陸を距り海に浮き進退出没世の人を知らず要す
 月暗く風波静まり夜肥前の九艘見崎の船を近づけ或は江浦東嶋若松
 西嶋奈苗兵庫得仙白石佐井宮岡栄螺赤嶋の船歌うて曉方は多し
 船を遠く退け浦曲の親ももこれ九ヶ箇の武士守護人の定むる月を
 知るも鎌倉より追討の沙汰も既して三松を歴るはこれの歳月を

空を送らばるもの歌二郎只一人の鎌倉の風俗を撈り知るを東に赴くと云あり。
或の智勇捷れる御士浮浪人を相譚ては身方小きえと折々南北の旅宿と
或の二ヶ月或の半年他郷あり経高主役の歌二郎も憚りて渠が船中に在る
と酒宴遊興稀れども他郷あり酒を耽り色を好む管絃の志は絶
る隙なく酒池肉林の宴樂に驕奢を極めて逆謀を謀り生涯のつとめを樂
と王侯の優りたる限りなきを以て如くも言はれし如くも
心利する雜兵を彼此遣て不老の術不死の藥を討ち頻りて不題鼠川加二郎
武行の曩相摸り動の磯中瀬川采女吉次と相撃つと身方の兩人長城
野兵太と奴隸貫九郎の必死の深疾は小きくもその勇は恙なかりし如くも
処を去る拔津の兵庫の船に居る鎌倉執權の下知とて逆賊経高
在処を知り撃ち捕て進ませる大罪ありしとてその罪を赦免し賞禄を賜る

下と拘れし加二郎を縛りて肚裏より書を取りしに主君の罪を以て鎌倉を道拂れ
更又又恐る瀬川吉次と撃ち果せし左も右も陰謀戸へ今を這圓の下知よりて
彼経高を撃ち捕らるるの罪を免されて本領安堵疑ひる。あや運の向へて
西國へ赴きて経高を索るのを尋思つてその年の夏の比より筑紫に到りて経
高が在所を搜索めり。一毫も便宜を以てせざりし程は盤纏竭くしとせし
なりければ次の年の春に比より肥前國松浦郡九艘見崎に漂泊し獵船に乗
りて漁獵して世を渡る程は今茲春二月の下瀬を綱よりけり。一口の大刀を獲り
柄を解放し大刀の銘を尋る不老不死の四字を鑽著り。登時加二郎采女
不老不死丸の名刀の瀬川采女が先祖相傳の重宝を長廿一尺六寸あり。吉次常小
副佩りて身を放さむとゆふと豫め候へり。この刀をわんごめられし吉次は
暴波小引きし。名刀も海に沈みし。あや漂ひまされる。とて言はれし名刀を

售價るる。○の隨價をゆへ下よ。○物獲ると。○此の刀を携りて。○日暮る。○巷を去る。○
人の過るる。○毎の声高き。○呼る。○つれづれ。○一口の名刀あり。○此は。○見唐。○山。○後漢。○の仙
人。○鍾離。○權。○を。○め。○俗。○に。○在。○り。○と。○此。○異。○人。○は。○あ。○り。○授。○せ。○れ。○青。○龍。○の。○劍。○即。○ち。○我
朝。○の。○文。○治。○年。○同。○常。○陸。○坊。○海。○尊。○を。○夢。○想。○の。○感。○得。○く。○不。○老。○不。○死。○丸。○と。○名。○づ。○け
る。○異。○國。○傳。○來。○の。○靈。○劍。○を。○人。○の。○一。○れ。○を。○帶。○り。○と。○此。○魔。○を。○降。○し。○禍。○を。○禳。○ひ。○富。○貴。○を。○の。○身。○に
餘。○り。○あ。○り。○と。○壽。○命。○の。○天。○地。○と。○等。○し。○の。○一。○つ。○り。○の。○刀。○も。○換。○さ。○る。○宝。○珠。○も。○の。○徳。○を。○の。○相。○応。○し
か。○と。○此。○沽。○却。○さ。○え。○と。○誰。○と。○二。○千。○兩。○の。○金。○を。○り。○て。○の。○名。○刀。○を。○買。○ん。○や。○不。○合。○れ。○買。○ま。○せ。○と。○誇
り。○の。○日。○を。○嘆。○き。○も。○人。○命。○狂。○人。○と。○と。○笑。○ひ。○げ。○る。○の。○ま。○り。○け。○り。○有。○此。○程。○は。○彼。○經。○古。○回。○か
指。○揮。○ふ。○よ。○り。○不。○老。○の。○術。○不。○死。○の。○藥。○を。○討。○ん。○為。○の。○扁。○舟。○と。○九。○艘。○見。○崎。○の。○磯。○邊。○お。○著。○て。○彼
此。○を。○徘徊。○し。○る。○乾。○坤。○丸。○の。○雜。○兵。○兩。○名。○今。○加。○二。○郎。○が。○云。○と。○呼。○り。○る。○と。○ち。○は。○て。○る。○得。○又。○し。○と
詰。○る。○ふ。○加。○二。○郎。○は。○め。○く。○と。○説。○誇。○と。○前。○の。○如。○し。○雜。○兵。○終。○び。○領。○さ。○る。○主。○君。○の。○の。○月。○ご。○ら

不老の術。○不死の藥。○を。○求。○め。○め。○る。○類。○の。○ま。○り。○の。○刀。○の。○奇。○特。○あり。○と。○は。○か。○ら。○い。○と。○い。○ふ。○價。○を
論。○を。○買。○せ。○め。○ん。○誘。○共。○侶。○の。○ま。○り。○と。○い。○ふ。○加。○二。○郎。○も。○亦。○然。○と。○伴。○れ。○り。○程。○は。○士
卒。○の。○件。○の。○扁。○舟。○は。○加。○二。○郎。○と。○ち。○乗。○し。○何。○処。○と。○い。○ふ。○漕。○ま。○ら。○ま。○る。○と。○加。○二。○郎。○の。○誘。○を。○と
き。○く。○宿。○所。○を。○詰。○る。○ふ。○雜。○兵。○の。○よ。○り。○も。○答。○へ。○せ。○汝。○只。○今。○回。○と。○も。○彼。○處。○へ。○参。○ら。○み。○が。○ら。○知
らん。○と。○主。○君。○の。○京。○家。○の。○あ。○り。○と。○又。○鎌。○倉。○へ。○も。○後。○ひ。○の。○ま。○を。○天。○地。○の。○間。○に。○獨。○立。○し。○と。○富。○大。○洋。○と
有。○ち。○め。○は。○さ。○ま。○り。○の。○物。○何。○れ。○わ。○ん。○れ。○ら。○ふ。○と。○稱。○せ。○め。○價。○は。○汝。○が。○隨。○意。○と。○い。○ふ。○然。○る。○或
沾。○む。○と。○う。○と。○言。○語。○ひ。○と。○く。○窶。○め。○と。○頻。○り。○不。○艱。○と。○操。○り。○け。○る。○時。○乾。○坤。○丸。○の。○連。○環。○船。○の
九。○艘。○見。○崎。○を。○相。○距。○る。○と。○五。○六。○十。○里。○の。○澳。○中。○は。○あり。○九。○艘。○見。○原。○九。○倉。○海。○を。○改。○て。○九。○艘
艘。○の。○連。○環。○船。○の。○出。○崎。○より。○ある。○日。○の。○餘。○の。○浦。○々。○より。○言。○ら。○れ。○九。○倉。○海。○を。○改。○て。○九。○艘
見。○と。○い。○ふ。○下。○間。○話。○休。○題。○焼。○口。○歌。○二。○郎。○得。○時。○の。○春。○二。○月。○の。○比。○より。○と。○乾。○坤。○丸。○の。○船
中。○は。○あり。○此。○れ。○病。○著。○の。○よ。○り。○は。○え。○と。○困。○せ。○る。○と。○い。○ふ。○經。○高。○と。○れ。○を。○母。○ひ。○ふ。○と。○い。○ふ

忌憚る所多し。この日由乱酒の酩酊し歌舞を侍見共ふらち雑やま主詔浮
 篲伊加太槍垣轉馬の左右に在り。紂を次見崇侯の時を得見よ高笑ひく
 傷よ肉を催しけ。浩処は肥前の松浦へ赴け。雑兵西三名鼠川加二郎を
 將くめり多。會共侶は跪く階下は声をぬりて心れ多。上ひを呼ぶ也。
 伊加太轉馬のこれをえりて何の疾まうせ。一人進よ。某木仰は後ひ
 連日港口々々を巡りて不老の術不死の薬を討あひ。今日九艘見崎
 る街頭に立ち。一口の刀を推し價一千金。雀んとひのあり。即便縁故を語ひ
 件の刀は不老不死丸と名ける。仙傳の灵宝。此刀を帶るとは富貴をのち餘り
 ありて壽命限り。との是ふよ。七件の男を召後。ひよ。のを經高。ちけく
 とのと愛。死名刀。傳束正。死徵や。あると。問れて加二郎を多く進。如額。春。推
 来る件の刀。とり揚。膝。推。立。抑。る。不老不死丸の名刀。は。後。漢。の。仙人。鍾。離

權が青龍の劍。即是我朝文治の年。回ふ至。常陸坊海尊。夢。想。か
 ち。を。感。得。き。仙。術。得。く。老。を。死。る。今。身。陸。奥。の。山。中。に。在。り。其。が。先。祖。の
 海。の。仙。人。俗。縁。あり。ある。この。名。刀。を。相。傳。せ。り。人。の。某。薄。命。めて。この。刀。を。帶
 る。相。応。し。る。を。徳。ある。人。の。賣。り。と。還。て。便。著。と。ゆ。べ。と。示。現。と。蒙。て。は。一。千
 金。の。價。を。求。め。り。賣。り。と。ゆ。べ。日。毎。街。頭。に。在。り。人。を。俟。た。れ。ども。い。ま。は
 望。を。遂。げ。り。賢。君。の。御。内。人。の。刀。を。と。り。参。上。せ。り。と。い。れ。ば。洪。波。を。犯。す
 参。上。せ。り。と。為。り。大。財。主。願。ひ。先。と。商。し。と。買。取。り。せ。り。と。賣。事。と。説
 誇。り。刀。を。高。く。と。ま。れ。ば。伊。加。太。郎。あ。ら。る。て。執。次。の。刀。を。經。高。の。女。に。受。取。り
 拔。き。下。より。刀。尖。を。熟。ら。ち。え。ら。ち。微。笑。し。仙。傳。授。与。の。来。歴。を。定。め
 る。ぬ。り。ま。れ。ども。名。刀。は。疑。ひ。る。不老不死の銘。小。愛。く。價。の。切。望。は。任。ま。り。と。い。は。ぬ
 生。れ。る。の。漢。者。の。い。は。す。ば。悪。ま。告。よ。い。は。ぬ。と。問。き。加。二。郎。は。可。擬。議

せめて賢察の如く某の鎌倉の執權北條時宗は仕て泉川加二郎武行と
呼ぶものも朋輩の諛言を釋ん為す對決を請まらせり時宗見及員の沙汰を
のく某を追放せりこの死な場を免れ件の諛者瀬川采女吉次との争のを動の磯を
敷き果して遠く肥の洲の隈を隠せし浮浪三稔及及をの般羅纏めてせん樹を
けれの漁翁の身を富して細引をて生活とあり己をせむるの世の賢君良
將ありて用ひらるるのゆり死をて仕まらんと豫より思ひいたいと憚る言る
がら御向ふ某御内人の刀を求めある主の宿所を向ひしよ吾主君の京家にあ
む又鎌倉君も後ひの富大洋と有ちあるはれりてをあるるけれ余ら
君の東海の龍王の如きをらんあ何処の如きと問ひ経高うらみひく汝が疑ひ
さるの事今この素生を請せをせり昔主時宗は罪をぬく諛者瀬川吉
次を敷き果し亡命あるものとひへりて人悪きを説示えけれ北條一家の大

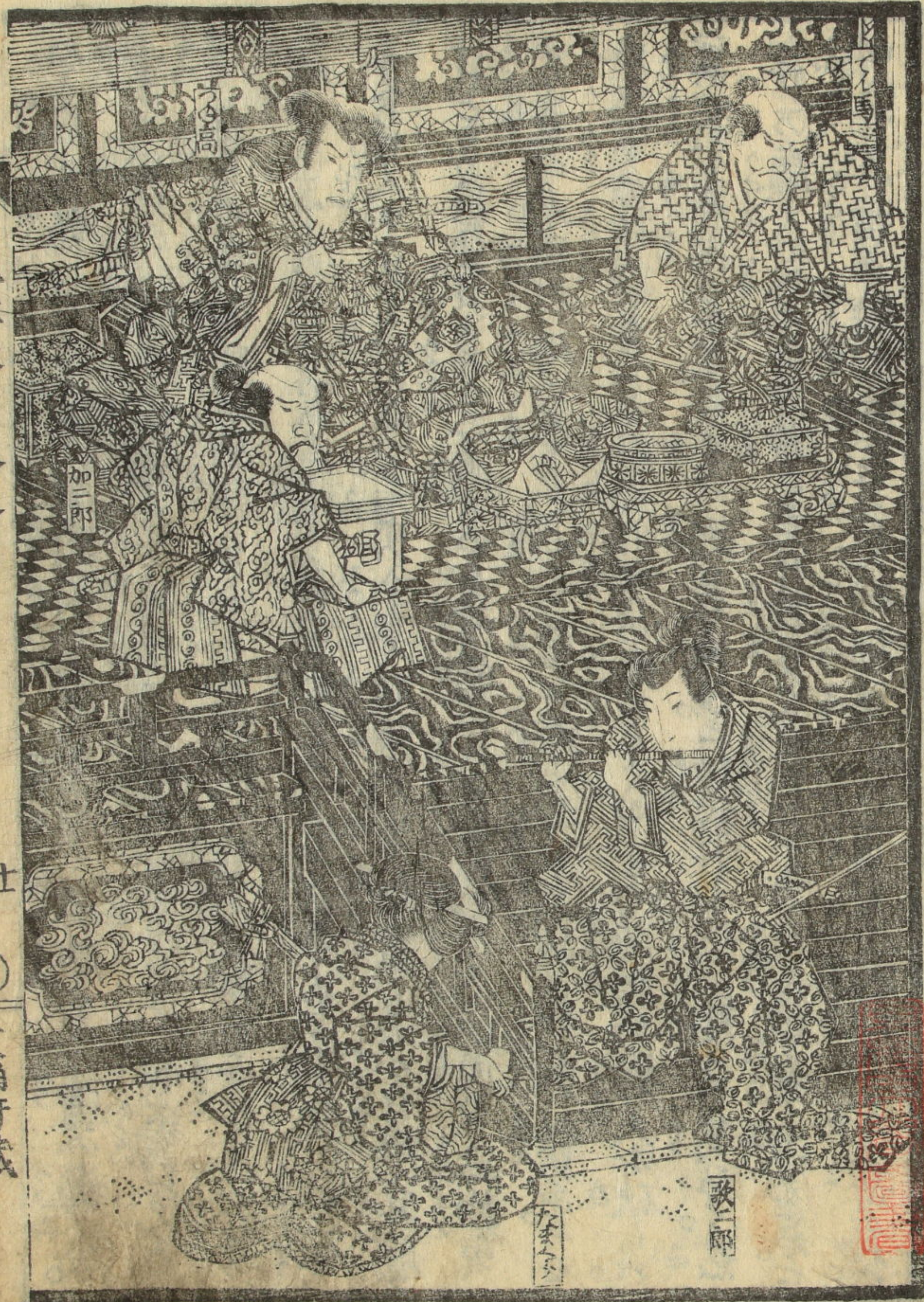
姓筑紫の探題経高を害せし時宗が非道の行をる忍び大義の旗を
揚ぐ勢を以て微ふして事成らる富方城を退きて下來この船中より残兵を
招集集めて九州を討畧せんとしひくくまでよろ安樂は先陰を送る牛淵
九郎が弟子なり一焼口歌三郎得時が忠義の資に依るのれりう身天授の洪
福を今又あま至らや歌三郎の三稔以来拍々諸國を巡歴してきく身方招
はるる智勇の良士をいぞ令まはしめ愛臣牛淵九郎清繩が雙敵瀬
川采女と敷き一と飲を飲る貴志一はよりと吾も仕へよ軍功あり重く用ひ
汝が心の如きと再回れて加三郎の肚裏ふとさうこれ兵庫に在り比より這経
高を敷き捕り鎌倉へ歸參せんと思ひけれ在処知まらば空に三稔を過せり
今圖らむと経高が隱宅はあまの寔はあまの寔は幸ひに楽身のよるを
船に住ひ水は酒は此の安樂を誇るといふるは事ある且くあふ口を駐め

折を廻ひ敷き捕まへし経高とて結果も餘の奴原に怖るふ足とて呼ぶるなりと立
 地の分別なき莞尔と笑きてむろ一齊國の孫贖の片足痺て入る智謀の後の
 世も軍師の我朝の鎌倉権五郎景政の矢傷は金又目を失ひやる萬
 夫無當の勇士とある人のいひひたのれ君も某が冠弱不具多を嫌をさるる
 召使んと仰さるるの身の幸ひ何の致れは優にたのれ大馬の力を盡しと時
 宗と討滅を計議を旋くし久し既主後さるる見矢の牽出物よその名刀の
 を依り受収めさるる價と望ひのぞとの瞞る佞辨を経高疑ふ氣色も
 争然く鼠川加二郎は両刀衣裳を取らせんと声高き小呼れ遠侍は近
 習の杜校美のぬと心々大小の刀二口と小袖袴をさる具ひと長共さうち載せ
 しをさる兩人とのて来まければ加二郎れを受戴せし恩を拜退せし件の衣
 裳を被るるに登時経高は加二郎をねく来る雜兵ホと芳の皆額をた瘥

痺と捺りて武者屯へ退く程は加二郎の衣裳を更ぬ中刀を腰に帯て又経高は
 見参まじ経高れを口登て主後不精の不血を取らせんとする程は矮屏の陰より
 ちと吾君要時等せと林をく顯れぬものあり経高主後散馬を齊一其
 方とんくれは是則別人あるは焼口歌二郎得時と病後の衣裳華を腰刀をとり
 退け主は對し禮儀正しく志氣を祝する辨舌人柄重れて席上の不血盤と苦
 苦けけらるる氣色不憚る檜垣轉馬浮篁伊加太の身を縮と序次り
 一とよの歌儂はゆり侍見申と誰分付ぬと不血盤をさく取り身を起し
 逃る如く退死けりその中経高は酒嚙とを貌を改めあき瑠歌二郎御向を
 所労あうあく久く對面せりふあき猛の出仕の病著既瘥瘥り飲
 火急の要譚ある故飲と向ふ歌二郎膝を進めさる賤恙全くと瘥るもや上
 登死よりわれ推く只今出仕せり君の大義を外市と日毎の酒官女遊興女子

小人を近づけ、樂く思召す。欲す新の巢造りし鳥の新燃て巢を焼く。知らざるま
 似くいと危し。某彼処ゆひく鼠川加二郎が進ませる不老不死丸の傳末も渠を
 家臣にまされしゆも洩せし毎ああらぬと疑ひぬのこ言り。願ひ御免を蒙
 りて。義を質しゆんとひ加二郎より對ひて武行近く進み、和殿の名刀の
 後漢の仙人鍾離權が青龍の劍ありしを海客が感得せしとありて信られぬ。
 某曾才子傳列仙傳に據て考ふる鍾離權字の叔道和谷子又王陽子
 と號し又雲房先生と稱し、この人漢帝の命を受けて吐蕃の羌胡を征伐
 せし利を失ひて思も山谷を走り入りて異人へ遭ふ仙術と青龍劍の
 法を授けり。かれが青龍劍の名目の只一腰を指て、劍の名ありて、壁言ひ彼
 傳燈録に活人劍殺人劍の名目あり如く青龍劍の仙傳の法術の名あり
 ず。維然る劍ありとも今る所打刀劍の總て兩刀あり。辟邪斬るを利と

まれば便和名とつる。たのけは和殿が推考する不老不死丸の片刃をのこると
 和名せし片刃刃とい義あり。その美いゆゆと註記されても加二郎の此も其
 文字に疎けれ青龍劍の仙方の名も不詳とあらねども初に劍をけんを海
 尊これを感じ得しと鍛更せし刀も亦知るべし。たのけの片刃もあま
 刀劍の利とて所へ堅さを破るを室とて其く不死丸の利鈍を銚し、藤
 身の軀もとも豆腐と切るより易く、一は仙傳の徴とて、歌二郎領
 なくとて究竟の物をとれ某新刀を銚さんとて雜兵ホ分付く世よりへる
 と食悲人をたぐくまもとて遣せし長門州大津郡阿川のあむら、向とい
 出崎あぐ一箇の癩人と捕へられ、其病中るもとて、雑兵ホ預置
 ぬ。あむら、をの銚をへ、吾君も脚覽せよといひ、外面より向ひて者共、あむ
 預置る向の癩人を牽出せしとて、呼ばる豫く準備とて、けんを



病人も世ふあればあつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎
あつたのふと嘔吐のあつた胸のうらさくさくさうさうと歌二郎

頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の
頼人の繩合も雑兵を傍へ退け立昇るを秋布をきくそと彼へは日向の

瀬川吉次が妻秋布の傳稀る美人と年来傳信するがゆゑまゝて妖艶を
骨細く肉柔に美女とて銚の鉛刀をも必研まへ渠志を傾けてこれ後人の
るの壁妻あり親く使ふ秋布と共侶は生拘りる者ありを牽率で銚をよ
彼を殺す惜しむとて歌二郎合衆を如右思ひ口を吉次を銚を
とらふ秋布驚馬なく佐と向上る怨の目尻あふ初歌二郎と面を對し亦驚
びく。死の星裏に偏哲菴ありて必死を救ひひ。彼を名氏ありと回す
まを歌二郎の耳も被けを声を苛立この女子が押々には回さるるを叱
懲りと共しく又経高より對ひく吾君鼠川加二郎が食言を信ぜぬ
瀬川吉次を動の磯中敷果せりと正しは小まきせむ吉次は死を後僕
閑蓑七共侶は伊万里の郷土根塚若二郎許寄宿せを某既生拘り
とよ加二郎実支とせだ速く進み對ひて宣ひまるともねも彼吉次と某が

敷果せり相違生拘られ別人とるも歌二郎の輒然とうち笑
ひく武行今も手ふ秋部語ふ論より證據者共き吉次もまた生
と呼ぶ忠雜兵親とて捕索被け吉次を先小宮閑蓑七と若二郎と
枕と珠敷敷と追立る秋布と推並縁頗近く牽居り加二郎吉
次を驚駭死怪を又よもるりり歌二郎ももと又経高より對ひく吾
君彼ホと脚踏せよ年る舟女は吉次次は又蓑七と又次多男女二人の
瀬川浦二郎が結髪を妻々秋布と親根塚若二郎と枕との夫婦とを
女見糸秋を追留んと旗津の浦よあふ雜兵ホと捕拘へ吉次夫婦主
後と共侶牽を牽を牽を昨夜半のあふれは知召れぬる星裏に鼠川加
二郎が敷りといふ吉次あふを吉次の弟浦二郎の厄代と加二郎の
る。とよ加二郎もあふ吉次の清繩が雙言敵ふとよ加二郎の武士

鎌倉御軍の時三絃の胡琴の類も御武の御下へ相入一絃の琴とて来りし國史あるはこれ當時所云三絃の胡琴六月琴運不似の類もものぞん

渠と身方小をさして大木ありん。思まより其さぬくは辭を盡しと説勧め
使も^{あつ}兼引ひつゝ^{あつ}計ひゆんと向へ^{あつ}経高沈吟と現吉次と身方よ
るさ^{あつ}ば萬卒とゆるさ^{あつ}る優下然れ^{あつ}秋布と若七と若二郎の枕を縛の索を
要安時^{あつ}實一と吉次を主貝さ^{あつ}せよ吉次を志を改めくつと忠臣とあつて秋
布を返一與へ^{あつ}く若七若二郎も^{あつ}親く使んゆ^{あつ}又この議を兼引か^{あつ}る名刀
りく吉次が^{あつ}軀を^{あつ}銚を^{あつ}とるま^{あつ}若七若二郎も^{あつ}皆殺しと秋布も^{あつ}側室
せん^{あつ}ぬれば^{あつ}衰七と若二郎も^{あつ}皆を^{あつ}とる^{あつ}飽き^{あつ}て吉次を^{あつ}歐懲さ^{あつ}る又秋布を
筑紫系琴の枕の三絃の胡琴と^{あつ}りて^{あつ}これを^{あつ}慰む^{あつ}る人の^{あつ}心と和ら^{あつ}る^{あつ}立曲と^{あつ}る
る一と吉次が張詰を我慢を琴の調子小和らげ又二枝の管と^{あつ}て^{あつ}歐へ^{あつ}苦痛は
堪む^{あつ}てい^{あつ}て兼伏せ^{あつ}る^{あつ}秋布若七若二郎夫婦の^{あつ}命^{あつ}も^{あつ}命^{あつ}も^{あつ}背^{あつ}け^{あつ}る
先吉次を殺し^{あつ}く勢ひを^{あつ}とる^{あつ}斬人^{あつ}ハ則鼠川加二郎^{あつ}雜兵^{あつ}も^{あつ}ち^{あつ}圍^{あつ}む^{あつ}と

非常と敬言め^{あつ}ると送る^{あつ}隈^{あつ}り^{あつ}下^{あつ}知^{あつ}れ^{あつ}ハ歌二郎ハ一^{あつ}談^{あつ}不及^{あつ}て吉次夫婦主授
と若二郎の枕の主命を具^{あつ}て^{あつ}雑兵^{あつ}も^{あつ}あ^{あつ}る^{あつ}り^{あつ}四人の^{あつ}命^{あつ}を^{あつ}解^{あつ}す
れ^{あつ}ハ^{あつ}経^{あつ}高^{あつ}ハ秋布と^{あつ}理^{あつ}り^{あつ}側^{あつ}に^{あつ}召^{あつ}登^{あつ}る^{あつ}と^{あつ}く^{あつ}琴^{あつ}と^{あつ}與^{あつ}へ^{あつ}と^{あつ}り^{あつ}身^{あつ}性^{あつ}急^{あつ}ハ伊
加太轉馬ハ阿と^{あつ}志^{あつ}と^{あつ}歌^{あつ}女^{あつ}が^{あつ}片^{あつ}に^{あつ}置^{あつ}る^{あつ}筑紫系琴と三絃の胡琴を秋布と
の枕^{あつ}が^{あつ}膝^{あつ}の^{あつ}ほ^{あつ}り^{あつ}推^{あつ}ま^{あつ}る^{あつ}雑^{あつ}兵^{あつ}も^{あつ}推^{あつ}つ^{あつ}て^{あつ}口^{あつ}を^{あつ}と^{あつ}り^{あつ}若七と若二郎と
與^{あつ}る^{あつ}と^{あつ}兼^{あつ}責^{あつ}め^{あつ}ると^{あつ}催促^{あつ}を^{あつ}然^{あつ}程^{あつ}ハ秋布ハ親^{あつ}の^{あつ}冤^{あつ}家^{あつ}と^{あつ}面^{あつ}り^{あつ}膝^{あつ}を^{あつ}對^{あつ}て^{あつ}海^{あつ}賊^{あつ}の
心慰む筑紫系琴^{あつ}の^{あつ}音^{あつ}の^{あつ}あ^{あつ}る^{あつ}苦^{あつ}い^{あつ}ハ^{あつ}撰^{あつ}盡^{あつ}され^{あつ}ぬ^{あつ}と^{あつ}り^{あつ}二^{あつ}の^{あつ}緒^{あつ}を^{あつ}懸^{あつ}け
り^{あつ}て^{あつ}良^{あつ}人^{あつ}の^{あつ}命^{あつ}根^{あつ}と^{あつ}り^{あつ}め^{あつ}んと^{あつ}思^{あつ}ふ^{あつ}と^{あつ}怨^{あつ}の^{あつ}涙^{あつ}最^{あつ}逼^{あつ}り^{あつ}細^{あつ}り^{あつ}指^{あつ}て^{あつ}假^{あつ}流^{あつ}の^{あつ}ま^{あつ}敷
り^{あつ}の^{あつ}秋^{あつ}を^{あつ}波^{あつ}の^{あつ}音^{あつ}の^{あつ}高^{あつ}に^{あつ}船^{あつ}扉^{あつ}苦^{あつ}海^{あつ}愛^{あつ}河^{あつ}の^{あつ}浮^{あつ}世^{あつ}の^{あつ}中^{あつ}に^{あつ}修^{あつ}羅^{あつ}の^{あつ}鼓^{あつ}を^{あつ}
とも^{あつ}夢^{あつ}とも^{あつ}り^{あつ}ぬ^{あつ}枕^{あつ}が^{あつ}下^{あつ}敷^{あつ}れ^{あつ}ハ^{あつ}子^{あつ}を^{あつ}膝^{あつ}に^{あつ}筋^{あつ}の^{あつ}糸^{あつ}杖^{あつ}の^{あつ}性^{あつ}方^{あつ}甚^{あつ}慮^{あつ}と
と^{あつ}同^{あつ}り^{あつ}る^{あつ}音^{あつ}ハ^{あつ}澳^{あつ}の^{あつ}小^{あつ}夜^{あつ}衝^{あつ}心^{あつ}を^{あつ}生^{あつ}死^{あつ}の^{あつ}海^{あつ}も^{あつ}深^{あつ}死^{あつ}の^{あつ}袖^{あつ}ハ^{あつ}雨^{あつ}漏^{あつ}れ

口尾録後集卷之二

五

衰七の推辞する一期の浮沈浪の花ちるを若二郎又四責の役と不云と
 されども其侶は答をとり取り取り何処を敵えうたのめれ其の身も
 ぬぐやと形を世を憤る四人のあうり及び吉次のみ屠所の羊は死を
 観念の外をりし時を殺れと経高が焦燥随ひ呼續の濱をりり波風の彼
 方足方立騒ぐ加二郎轉馬伊加太郎罵促を外面の雑兵大約二千名
 稲麻の如くち聞え弓箭短槍と擧げて諸声合と聞たる聲の勢ひ今ま
 免れぬ甲の集集鳴雁も似る琴柱を彼此直と馳く操持を直愛や浮世の
 秋布が調子は做る枕も三弦要時試も涙は声のせり乾涙の愁を生
 隠む汀渚の蘆の節博士歌二郎の懐より笛より中と漂々と吹合は管
 絃の三箇の音色は餘念なき経高の側送や不意を又と揚て轉馬の駒を
 執らんと詞曲子を有中と貞よる息も息五韻愛え秋布とあうり合

まるも枕も立音を資負けと詞を聴け。あつる筆に任せぬ文字の関眺めあつる間の
 関の戸もあつる圍の強顔こそいふ岩越を浪まらとと詞ひ自らよと泣く妻を
 する吉次のあつるも嗟嘆して命運薄く四賊の為は擄とるより存命べく
 由あるぬの救を工もあつると思ふ妻子の思心こそ志士の溝壑は經ることを辞せ
 勇士六元を喪ふ工を忘れむと工をせむのを冠履処を異はるともこれ豈賊の後
 父もよく殺せ経高といふを衰七推林示めて不覚世話といふ乞者も捧毆物
 体も一忍びるを忍びたがみぐら破るの悔あつる權く拒ボがせんやとをせめと諺
 若二郎も亦声を潜めて関氏の言究めて理あり枯葉の登るを朽木の花
 さつと然るをみぐら死を急ぐの大勇もあつる一美里の阨も釋る自の身も天命
 任するは是大丈夫といはるものと諫め答を振揚れども打たれをあれ雑兵も
 多く毆と罵嘯くも毆せとと秋布が又詞ひ續ぐ声妙は「よき返り

磯千鳥以下又秋枕、奇怪なる三人、偕々牽出、と首を刎と、敦圀ハ加二郎ハと、懽び、御談
寔ハ感佩サなり、彼名刀ハのつゝ、某銚ハといふ、臆シと、立んと、世を歌二郎推
禁め、且経高を諫ムり、吉次ハと呵責スのり、御意ハを治、御意ハは任、執
ぬと、た彼ホハが為、体を怒、とせの、理ルるレれ、御ホハの義士ハと貞女、勢ハひハを、と
遍ニと、た、いハまハまハと、く死を樂、とせ、首ハ命ハは、後ハづハづハと、九石ハの、弓ハとい、と、目、是、と、張、
と強、折、れ、く、弓、の、要、を、さ、を、緩、め、後、張、と、本、末、狂、を、折、る、と、する、。

